釧路市教育委員会　令和５年第１９回１０月定例会会議録

１　日時：令和５年１０月２７日（金）１３時３０分から１５時００分まで
２　会場：釧路フィッシャーマンズワーフＭＯＯ　２階　教育委員会室
３　出席者
　　岡部義孝教育長
（教育委員）
　　山口隆委員、種村俊仁委員、小出美貴子委員、籾山彩子委員
（事務局）
　　齋藤学校教育部長、工藤生涯学習部長、森学校教育部次長、大島総務課長、本川教育指導参事、齊藤総括指導主事、外崎青少年育成センター所長、小西教育政策主幹、神谷給食担当主幹、及川北陽高校事務長、澤口生涯学習部次長、鈴木動物園長、松本博物館長
４　議事録署名人　　山口委員　籾山委員
５　傍聴人数　　０人
６　提出案件
【公開案件】
　報告事項
　（１）音別地区義務教育学校開校準備協議会における校名・校歌・校章の選考について
　（２）大楽毛地区義務教育学校開校準備協議会における校名・校歌・校章の選考について
　（３）学力向上協議の結果について
　（４）令和４年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査について
　（５）釧路北陽高等学校の台湾見学旅行について
　（６）学校の現状について

７　会議内容

【公開案件】報告事項

（１）音別地区義務教育学校開校準備協議会における校名・校歌・校章の選考について

（小西教育政策主幹）

報告事項１、音別地区義務教育学校開校準備協議会における校名・校歌・校章の選考について報告する。

昨年１２月に策定した「釧路市がめざす学校のすがた基本計画」に基づき、令和８年度に開校を予定している音別地区における義務教育学校の校名については、令和５年５月定例教育委員会にて報告させていただいたとおり、音別地区における開校準備協議会の第１回会議結果に基づき、令和５年７月３日から８月２日の期間、大楽毛小学校の児童・保護者・教職員・卒業生、大楽毛中学校の生徒・保護者・教職員・卒業生、鶴野小学校の児童・保護者、「認定こども園よしの」の園児・保護者・教職員、「釧路おたのしけ認定こども園」の園児・保護者・教職員、大楽毛小・中学校区にお住まいの方を対象として公募を実施した。

その結果、関係者の皆様のご協力もあり、６８件、５１案のご応募をいただいた。

この公募結果をもとに、令和５年８月２９日に開催した第２回会議において、校名選考の審議を行ったところであるが、校名案が多くあったことから、ご応募いただいた校名の中でよく使われていた「音別」、「北のビーナス」という言葉と、「義務教育学校」などの学校の名称を組み合わせたものを、第３回会議までに、改めて委員１人１票投票し、その結果を踏まえて選考することとなった。

その後、各委員から校名の投票が行われ、それを取りまとめたものを１０月１１日に開催された第３回会議において事務局からお示しし、委員の皆様で審議していただいた結果、新しい学校名を「釧路市立音別義務教育学校」と選定したところである。それに伴い、開校準備協議会の名称も、「音別義務教育学校開校準備協議会」と変更することとなる。

また、この第３回会議においては、校名を選定したほか校歌・校章についても協議していただいた。校歌については、現音別小学校の歌詞の一部にある「音別小学校」という箇所を「音別校」に変更したうえで、「現音別小学校」の校歌を「第１校歌」、現音別中学校の校歌を「第２校歌」として教育課程によって分けて使用することとなった。校章については、音別小学校の校章が、音別の自然や産業を表しており、子どもたちにはふるさとの歴史や産業を校章の由来から知ってほしい、という理由により、現音別小学校の校章を引き継いで使用することで決定したところである。

第３回会議におけるこれらの結果については、協議会ニュースを発行し、広く周知していく予定である。なお、開校準備協議会は、今後、引き続き、通学路の安全や教育目標や教育課程について協議を進める予定であり、進捗があれば、その都度報告させていただく。

（２）大楽毛地区義務教育学校開校準備協議会における校名・校歌・校章の選考について

（小西教育政策主幹）

報告事項２、大楽毛地区義務教育学校開校準備協議会における校名・校歌・校章の選考について報告する。

報告事項１で説明した音別地区と同様に、「釧路市がめざす学校のすがた基本計画」に基づき、令和８年度に開校を予定している大楽毛地区における義務教育学校の校名については、大楽毛地区における開校準備協議会の第１回会議の結果、令和５年７月３日から８月２日の期間、大楽毛小学校の児童・保護者・教職員・卒業生、大楽毛中学校の生徒・保護者・教職員・卒業生、また、通学区域が大楽毛地区に変更されることも踏まえ、鶴野小学校の児童・保護者、「認定こども園よしの」の園児・保護者・教職員、「釧路おたのしけ認定こども園」の園児・保護者・教職員、大楽毛小・中学校区にお住まいの方を対象として公募を実施したところである。

その結果、関係者の皆様のご協力もあり、５７件、３９案のご応募をいただきました。

この公募結果をもとに、令和５年８月２４日に開催した第２回会議において、「釧路市立大楽毛義務教育学校」、「釧路市立大楽毛学園」、「釧路市立おたのしけ学園」、「釧路市立大楽毛小中学校」、「釧路市立おたのしけ義務教育学校」の５点を選考し、第３回会議までに委員１人１票投票を行い、その結果をもとに第３回会議で審議することとなった。

その後、各委員から校名の投票が行われ、それを取りまとめたものを１０月２５日に開催された第３回会議において事務局からお示しし、委員の皆様でご審議していただいた結果、新しい学校名を「釧路市立大楽毛学園」と選定したところである。これに伴い、開校準備協議会の名称も、「大楽毛学園開校準備協議会」と変更することとなる。

また、この第３回会議においては、校名を選定したほか校歌・校章についても協議していただいた。校歌については、現大楽毛小学校の校歌を引き継いで使用することとなった。

校章については、第３回会議では協議が終わらず、継続して協議することとなった。

なお、次回、第４回会議の日程についてはこれから調整する予定であり、第３回会議におけるこれらの結果については、協議会ニュースを発行し、広く周知していく予定である。

◎各委員から以下のような発言あり

（山口委員）

市の学校のあり方として６校の義務教育学校を立ち上げ、残りの学校は小中ジョイントプロジェクトを実質的に機能させながら小中の連携を図っていくという考え方に基づいて、義務教育学校立ち上げに向けて具体的に動き出したのだなと受けとめた。先週と今週、幣舞中学校と鳥取西中学校の公開研を見せていただき、授業の後に小学校の先生と中学校の先生が、小中の立場から意見交換を熱心にしており、とても良いことだと思った。６つの義務教育学校が立ち上がり、義務教育学校にならない学校が取り残されて、義務教育学校になればよかったという形にならないためには、本当の意味で小中ジョイントプロジェクトを自主的に前

に進めていかなくてはいけない。そのためには小中学校の先生による、子どもを中心に据えた授業をどう作っていくかという話し合いを、今後も大切にして欲しい。今回の２校の公開研はその先鞭をつけてくれたと思うため、大切にしてほしい。

【公開案件】報告事項
（３）学力向上協議の結果について

（齊藤総括指導主事）
報告事項３、学力向上協議の結果について報告する。
学力向上協議は、本市の課題である小中学校の学力向上について、各学校が主体的に学力向上改善策に取組む意識を高めることと、教育委員会として有効な手立てについて指導助言することを目的に、全小・中学校ならびに義務教育学校の管理職や学力向上担当教諭と、協議を行っているものである。今年度は本川教育指導参事、学力向上担当指導主事で実施した。その協議の中で、成果が上がっている学校の特徴、また逆に課題のある学校の傾向について、説明させていただく。
はじめに、成果が上がっている学校では共通して、学力向上に向けた取組みについて、全教員で徹底して行っている。また、各種調査結果や単元テスト、チャレンジテストなど、客観的指標となるデータを分析し、その改善策を考え、全教員で情報を共有している。さらに、学力向上に必要なことは授業改善であると考え、学校経営の中核に授業改善を位置付け、個々の教員が協働的に学び合い、職員の学ぶ意欲を醸成する組織をつくり、ICT 機器や動画等を活用しながら、どのような授業を目指すべきか、具体的な授業イメージを持てる取組みを行っている。
一方、課題のある学校の傾向については、全国学力・学習状況調査の結果分析の甘さ、内容別や問題別の傾向分析が弱いといったことがみられた。さらに、個々の児童生徒の実態把握の甘さや、児童生徒質問紙の分析とかけ離れた、実態に応じていない取組みを続けるなど、取組みの根拠を見出すことができないケースも見られた。
学校指導担当は全校共通の取組みとして、この協議の中で明らかとなった、成果の上がっている学校の取組み事例一覧を配布するとともに、校長の強いリーダーシップのもと、児童生徒の実態を的確に分析し、その改善に向けた具体的な取組みを全教員が一丸となって進めていくことについて、様々な機会を通じて指導助言していく。
さらに、教員へのサポートとして、日常の授業づくりにおいて、教員の悩みを解決できるよう、授業改善のクラスルームにおいて、指導主事と先生方がリアルタイムで掲示板のように双方向のコミュニケーションができる取組みを進めていく。
全国比－５P となった学校に対しては、冬季休業中や放課後の学習サポートにおける指導員の重点配置ならびに取組みそのものの質の向上、タブレット端末の持ち帰りを徹底し、タブレットドリル等を用いた基礎・基本の定着を目指した家庭学習の充実を図っていく。
また、来年度から、学力向上プランの着実な実行を目的に、全国比－５P の学校に対して、

追加の学校教育指導を実施し、丁寧な指導助言に努め、学力向上を図っていく。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり

（種村委員）
　この評価はアンケートを取ったものか。
（齊藤総括指導主事）
　ヒアリングをしたものとなる。
（岡部教育長）
　資料について取組み事例が単に列挙されたものとなっているため、授業改善に向けた取組みやスキルアップに向けた取組み等を体系的にまとめてほしい。
（山口委員）
　すべての先生方がこうあって欲しいという願いを説明してもらったが、自校が今後このように進めていかなくてはならないという認識を、すべての校長先生が持っているということでよろしいか。
（齊藤総括指導主事）
　その認識を持っていることを前提に考えている。学校指導訪問を丁寧に行い、しっかり位置付けて行えているかという検証を今後大切にしていきたい。
（山口委員）
　いろいろな学校を見せてもらい、うまく回っていると感じる学校は共通して、校長がリーダーシップを発揮し、先生方が同じベクトルで動いている。校長先生の存在が非常に重要だと思う。
（岡部教育長）
　３回目の指導はいつになるのか。
（齊藤総括指導主事）
　来年度から実施したいと思っており、９月から１２月の間に－５Ｐ改善されなかった学校については追加指導ということで日程調整していく。
（岡部教育長）
　今年度はこれで終わりということか。
（齊藤総括指導主事）
　終わりである。
（岡部教育長）
　一つお願いがある。次年度以降は１回目から２回目、２回目から３回目に向けて、都度、学校に対して次回までに改善して欲しいポイントを明確に指示していただきたい。良い学校の取組みを知ってもらい、それを活用して学校経営をお願いしても改善は進まない気がする。回を追うごとに具体的な指示をしていくことで鮮明になっていくと思う。
（山口委員）

１回目の話し合いの時に、このような取組みをするとこのようになっていくという資料が出ているため、あなたの学校ではこの中でどこにポイントを置いて取組もうと思っているかということを聞き取ることも、一つの手段かと思う。それに合わせて、教育長から話があったようにアドバイスをしていくのはどうか。

（本川教育指導参事）

全国学力学習状況調査の分析を用いて、この分野に力を入れていくべき、この教科のある領域では全道を超えているが、ある領域は大きく下回っていることに何か要因はあるのかというように、具体的な例を示しているところ。今後は助言いただいたように、より明確に学校に指導を行っていきたい。

（岡部教育長）

教育委員会において把握しているデータをもとにした指導のポイントと、現在学校が進めている学校改善の方向性は合っているのか。

（本川教育指導参事）

３９校全校の中では、合っている学校もあり、差異を感じる学校もあった。

（岡部教育長）

－５Ｐ以上離れている学校に限定した場合は、校長が示している改善のポイントと、教育委員会が様々なデータを押さえたうえで示した改善のポイントは釣り合っているのか。

（本川教育指導参事）

概ね釣り合っていると思う。－５Ｐの枠に入っている学校の中には、昨年まで－１０Ｐ近くだったところから、－５Ｐまで上がってきている学校もある。結果だけを見ると－５Ｐであるが、伸びで見ると－１０Ｐから－５Ｐまで上がっている学校は何校もある。そのような学校は方向性が間違っていないため、さらに続けると今後上がっていくことに希望を持てることから、個々の学校に応じた指導助言やアドバイスを続けていきたいと思っている。

【公開案件】

（４）令和４年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査について

（齊藤総括指導主事）

報告事項（４）、令和４年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査について報告する。

この調査は毎年年度初めに実施しており、１０月４日をもって確定値として文部科学省から公表されたところである。

令和４年度のいじめの認知件数は１，５９４件であり、昨年度より小学校は２６１件、中学校は１０４件、計３６５件認知数が増えている。

また、令和４年度の不登校児童生徒数は３５２人であり、昨年度より小学校は７人、中学校は３人増加、合わせて計１０人増加している。とりわけ、出現率（学校における不登校児

童生徒の割合）については、全体で３．５５％、小学校で１．７％、中学校で６．９３％であり、小学校においては、全道より高く、全国と同程度、中学校においては全国より高い状況ではあるが、平成２７年度以来、７年ぶりに全道より低い結果となった。

令和４年度の暴力行為については、昨年度に引き続き０件である。

確定値は以上であるが、本市のいじめの要因、不登校の要因及び、市教委としての現在の取組みについてあわせて報告する。

いじめの認知件数の増加要因については、新型コロナウイルス感染症の影響が続いたものの、部活動や様々な活動が再開され、子どもたち同士が接触する機会が増加したことにより、人間関係のトラブルがきっかけとなる状況が増えたことや、いじめの定義の理解及び学校の積極的な認知の姿勢が表れたと考えている。

不登校児童生徒の主たる要因については、小学校では生活リズムの乱れや親子関係等、本人や家庭に起因するもの、中学校については友人関係の構築、学習面や入学・進級時の不安等、学校に係る状況に起因する場合が多い傾向がみられる。昨年度と比較すると、小学校で無気力、中学校で入学、転編入学、進級時の不適応、生活リズムの乱れ、あそび、非行の割合が増加している。これらの対応として、学習面については個々の実態に応じた支援を充実させた授業改善を進めていくことが重要である。さらに、中１ギャップの緩和等、学校間、学年間のスムーズな接続等の対応を行っていく必要がある。また、「生活リズムの乱れ」については、特に中学校において増加しており、小学校段階での学級経営の充実、中学校への丁寧な接続、生徒指導の機能を生かした授業改善、家庭への啓発が重要であると考えており、この傾向は今後も続くことが予想される。

続いて、不登校児童生徒数改善に向けた取組みとして６点あげた。センター講座やキャリア教育の充実、授業改善の推進、小中連携（ジョイントプロジェクト）の推進、放課後学習サポートや長期休業中の学習サポートを活用した学習支援を行っている。特に今年度の重点として進めている、児童生徒の居場所づくりと学習保障では、新たに再編しスタートした「まなびや城山・まなびや鳥取」の活用、ファーストステッププログラム「こども家庭支援センター」の活用、各学校における別室対応の推進ならびにオンライン配信による学習保障等、ガイドラインに基づいたフリースクール等の連携、くしろ不登校の子とくらす親の会「くるむ」との連携など、不登校に関する様々な取組みを行ってきている。不登校の問題は社会の問題として捉えられ、個々の児童生徒のニーズに応じた教育環境を充実させる考えが保護者の意識を変えてきたことにより、釧路市の不登校対策についても全国同様、新しい局面に転じていると考えられる。直近の取組みとしては、教育支援センター「まなびや」と学校の連携強化、「まなびや鳥取」の拡充を図っていきたい。さらに、各学校が日常的に不登校児童生徒へ適切な対応ができるよう、不登校対応コーディネーターを対象とした研修機会を設定し、充実を図っていきたい。

今後、教育委員会としては、不登校児童生徒の個々の状況を的確に把握し、多様で適切な教育機会を提供できるための様々な方法について、文部科学省がすすめている「学びの多様化学校」いわゆる「不登校特例校」や「公立夜間中学」について、国の動向も注視しながら

研究をすすめていく。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり

（山口委員）
　不登校の主たる要因に関わる資料に関しての質問で、中学校の本人に関わる状況では無気力・不安の数が結構多いが印がついていない。小学校では無気力・不安の３５人で印がついている。何か中学校の方は印をつけなくても良い理由があったのか。
（齊藤総括指導主事）
　説明が足りなかったが、この印については、昨年度のデータと比較して大きく増加していることを表している。委員ご指摘の通り、中学校での無気力・不安について低い数字ではないものと捉えているが、昨年１０７件から今年９６件と微減になっているため、今回は印をつけなかった。
（山口委員）
　不登校に関わる考え方であるが、学校に行けない子どもたちに対する学習保障としてどのような場が必要なのか、どのような方々との連携が必要なのかというところで、かなりきめ細かな対応がとれていると思う。知り合いの保護者の方から、不登校の話を聞いたところ、地元の高校には行けなかったが、テレビコマーシャルで目にするＮ校や、クラーク高校のような単位制の高校があることによって救われ、そこに通いながら大学進学に関してもきめ細かくその学校で対応してもらうことができ、ようやく肩の荷がおりたという話を聞いた。そのため、まなびやでは、どうしても中学校卒業まで行けず、悩みを抱えて悶々とする日々が続き、高校進学は定時制や市外の公立高校などに進路を決めている保護者も本人もいると思うが、プラスアルファの選択肢として、最近実績が上がっている単位制の高校もあることを教育委員会の認識として持ちながら、保護者対応や、保護者同士のネットワーク、くるむの方々との対応でも、教育委員会からそのような情報提供も今後視野に入れながら対応する必要があると感じているが、いかがか。
（齊藤総括指導主事）
　くるむも含めて、不登校対応コーディネーターの研修会等の機会を通して、いろいろな選択肢があるということをアドバイスしていく先生方の資質を高めていくことが一番大事なことであるため、教育委員会から積極的に情報を発信して資質を高めていきたい。
（籾山委員）
　くるむが１４日に開催していた、「釧路市教育委員会に不登校のこと聞いてみよう会」について、実際の様子を聞きたい。
（齊藤総括指導主事）
　当日は私と教育支援課の成田課長補佐の二人で参加した。基本的には釧路市教育委員会で取組んでいる不登校対策について説明した。質疑応答の中で不登校の保護者の方々は、進路の不安や、社会に適応できるのかといった悩みが多いことが明らかになり、そのような質問

の一つ一つに丁寧に回答していき、進めていった。保護者たちと話したが、今後も教育委員会含めて学校は不登校の保護者の良き伴走者でありたい、また、そのうえで相談体制を確立していくということに関して学校側に語り掛けていきたいとお伝えした。

（小出委員）

先日、大館市のマイスターの授業を見させていただいた際、授業が上手なことのほかに、授業の雰囲気づくりや、子どもたち同士の関わり方のようなところで、お互いを否定せず、認め合って授業を作っていく様子が見られた。授業からそのようにしていくことで、日常生活でも友達同士でそのように接していくことができるようになり、学校に自分の居場所があると子どもが感じ、学校に行きたくないという子どもが減るのではないかと思いながら見ていた。そのように授業をしている大館市では、不登校の数はどうなっているのか疑問に思ったのだが、いかがか。

（齊藤総括指導主事）

正確な人数は聞けていないが、大館市の授業マイスターと話した際、そのことについて質問をした。釧路市とで人口比が違うところはあるが、出現率に関して小学校においては低く、中学校においてはそれほど大きく変わらない印象を受けた。

（岡部教育長）

１点だけお願いがある。もし来年も同様の資料を作成する機会があるのであれば、いじめの認知件数を分けて作って欲しい。いじめが不登校に関係しているものもないわけではないが、この資料では密接に関連しているように見える。同じ調査から作成している資料ではあるが、整理をお願いできればと思う。

（山口委員）

国の認識はどうなっているのか。いじめと不登校が一つにまとまった調査が下りてくるのか。

（齊藤総括指導主事）

調査自体はそうであるが、考え方としては切り分けられている。

【公開案件】報告事項

（５）釧路北陽高等学校の台湾見学旅行について

（及川北陽高校事務長）

報告事項（５）、釧路北陽高等学校の台湾見学旅行について報告する。

台湾への見学旅行については、令和２年度に初の実施を計画して以降、コロナ禍により３年続けて国内へ変更となった。今年度、３年越しで実施可能となり、現在は来月の実施に向けて準備を進めているところである。

目的については、国際理解を深めること、外国との学校交流を通して自分たちの地域を詳しく知るとともに、英語を活用したコミュニケーションを身に付けることなどを主な目的としている。

日程については、３日目に予定している景文高級中学校との交流がメインテーマであり、これまで実施したオンライン交流で知り合った生徒同士が初めて直接顔を合わせ、更に親交を深める機会にしたいと考えている。訪問時には、北陽高校の生徒・教員をはじめ、岡部教育長、齋藤学校教育部長にも出席いただいた中で、歓迎セレモニーと学校交流が予定されている。学校交流については、３時間程度の時間の中で、生徒がバスケット、バレーボール、バドミントンほか、記載のようなプログラムに分かれて交流し、その後、学食で交流しながら昼食を取ることを予定している。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり

（山口委員）
先週、前段のオンライン交流を視察した。高級中学校とあるが、見学旅行に行く北陽高校２年生よりも年齢は下になるのか。
（及川北陽高校事務長）
景文高級中学校は日本でいう高等学校に相当するが、中学部も設置しており、英語教育に力を入れたカリキュラムを行っている。オンライン交流の際は、どちらの生徒も参加している。
（山口委員）
オンライン交流を視察した際、景文高級中学校の生徒は発音もよく、英会話のスキルが高いと感じた。一方、北陽高校の２年生は相手に比べてスキルが落ちるように感じたが、全ての生徒が果敢に英語を使って会話をしていた。北陽高校に入学してから、先生方が子どもたちへオールイングリッシュで行ってきた授業など、１年生から積み上げたものがあっての場面であったことを実感した。また校長先生が今の日本の英語教育は英会話、コミュニケーションの方にシフトし過ぎて、肝心な文法が疎かになっており、その点の弱さが北陽の生徒たちにも散見されるというコメントを残していた。
（小出委員）
相手が話したことを理解できていない子もいたが、そういう子も臆せずに伝えようという意思が見られ、その日は事前に作ったパワーポイントを相手に見せて、コミュニケーションを取っていた。事前にパワーポイントを作ったり、そこに英語の文章をつけたり、懸命に準備をしていたところも見られた。画面越しだった交流から、実際に会ってコミュニケーションをとるということで、すごく楽しみにしていると思うため、いろいろな経験を積んできて欲しいと思う。
（籾山委員）
私も同じようにオンライン交流を見学させていただき、各グループがしっかりと準備をして、一人一人が一生懸命やっている雰囲気があった。当日も生徒が積極的に英語で話して盛り上がっている様子を、どのグループでも見られたことがとてもうれしく思った。９月の定例教育委員会で英語のアンケート結果の報告があり、そこで英語を聞くこと書くことが好き

かという質問に対して、小学校５年生から高校１年生にかけて下降傾向の結果が出ていたが、高校２年生で肯定意見が増加していたことを覚えている。北陽高校の取組みがこのアンケート結果に実際に表れているのかなと感じた。修学旅行でさらに多くのことを感じていただけることを期待している。

（岡部教育長）

私は先週の交流の場面を見ていないが、１回目を見たときはそれほどでもなかった印象であった。今回、台湾に見学旅行先を決め、オンライン交流を進めていく中で、子どもたち一人一人の英語、外国語に対する理解が深まり、物怖じしないようになったのであれば非常にうれしく思う。これがさらに画面越しではなく、現地で実際に会って一生の付き合いになるような友人関係が生まれたら良いなと思い、そのあたりも見させていただこうと思っている。

【公開案件】報告事項

（６）学校の現状について

（本川教育指導参事）

報告事項（６）、学校の現状について報告する。

岡部義孝教育長の２度目の再任と、前教育指導参事の大山稔彦氏が新たに教育委員に選任されたことを改めて各学校に周知した。

教育長の再任に伴い、今後の教育行政の方針や方向性が大きく変わることはないことや、引き続き釧路市の教育課題や各学校が抱えている課題の解決に向けての学校経営の充実について、また、今年度の折り返し地点を過ぎたところで、４月に立てた学校経営方針の進捗状況、達成状況などについての数値的、質的な視点からの振り返りと、軌道修正すべき点があれば適宜その対策を講じるなど後半に向けてのチェックをするようお願いしたところである。

次に、かねてから計画していた秋田県大館市の授業マイスターを招聘して釧路市の子ども達に授業を行ってもらう企画が１０月３日に実現した。芦野小学校４年生で算数、鳥取中学校２年生で国語の２つの示範授業を実施したが、いずれも子どもたちが主役となる素晴らしい授業を公開していただき、多くの参観者からは感嘆の声が聞かれた。特に「子どもから考えを引き出すための見通しの持たせ方や机間指導のあり方、言葉がけの仕方」「子どもの反応をすべて肯定し、評価しているところ」「言葉を大切に扱うことの重要さ」「目指す子どもの姿や授業の姿、授業のゴールの明確さ」「共有と徹底の大切さ」等々、たくさんの感想が寄せられた。翌日は大館市の授業マイスター２名と釧路市の授業マイスターの代表４名で、授業づくり、学級づくり、授業力向上に向けて活発な意見交換がなされた。今回の示範授業が単に「大館市のマイスターはすごかった」で終わらせることなく、そこから得たものを釧路流、自分流のアレンジを加えながら、どの学校でも、どの先生の授業でも「釧路市が目指す授業の姿」、すなわち「子どもが主役の授業」が行われるよう「本気」で目指していきたい。なお、２つの示範授業とシンポジウムの様子については適宜編集をし、昨日１０月２６日か

らオンデマンド方式で配信をした。当日来ることができなかった先生を含め、市内の多くの先生方に視聴していただき、各自の授業改善の一助としてもらうよう、啓発に努めていく。

学校経営訪問を行っている中で、校長先生がリーダーシップを発揮して本気で自校の授業改善や学力向上に取組もうとしている姿が見られた。多くの校長先生は、毎日授業を見て回っている。短時間で参観した感想や課題等を口頭で伝えたり、あとでメモを渡したり、中にはＡ４用紙にびっしりとＰＣで打ってから個別に渡したりと、フィードバックの仕方も様々なようである。ある校長先生はタブレットを持って回り、授業中の良い場面に出くわしたらその場で１～２分程度の動画撮影をして共有サーバーに入れて全教師で共有していた。また、別の校長先生は１時間の中で「教師がしゃべっている時間」を実際に測定して入力し、客観的な数値で示して指導助言に活かしていた。一方、子ども達の「書く力」を鍛えるために、ある校長先生はＮＩＥの取組みとして５、６年生全員に新聞記事配り、子どもたちが各自選んだ記事の感想を書いて校長先生に提出し、校長先生は全員の感想にコメントをつけて返却する取組みをしていた。また、読書推進のために朝読書を復活させる学校や、「隙間時間」を活用するために机の中に常に本を入れさせ、隙間時間が生じたら本を読ませている学校もあった。これらは一例であるが、様々な取組みをしている校長先生方や学校が多々ある。何かをしようとしている校長先生は、当然ながら校長室に籠ってばかりいないで積極的に授業を見て回ったり、職員室内で先生方と校内で児童生徒と積極的にコミュニケーションをとったりする姿が共通して見られた。本気で学校を変える、本気で授業力を向上させるために、校長先生方のアイディアと実行力、そして強いリーダーシップに期待するとともに、これといったアクションのない学校や校長には一層の啓発を行っていく。

学校現場では１０月～１１月にかけては公開研究会の時期となり、先日、市教委の研究指定を受けている幣舞中学校、鳥取西中学校が公開研究会を行った。多くの成果もあったが、それぞれ課題も見つかった。今後も複数校で公開研究会があるため、それぞれの学校での成果と課題を、当該校のみならず全市的に情報共有して、全学校のレベルアップにつなげていきたいと思っている。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり

（山口委員）

まず１点目であるが、大館市のマイスターの先生が来られて、芦野小学校と鳥取西中学校で授業をやられた。芦野小学校で中島先生が行った公開授業の前段１時間、子どもたちと授業の受け方や授業に参加する姿勢について、約束事を確認した１時間があった。あの場面は非常に重要だと感じた。特別なことではなく、授業をする上での基本的な約束は絶対必要だということを、多くの先生方に知ってもらうための、良い教材になると思ったためぜひ生かしていただきたい。２点目、参事の説明の中にあったいろいろな授業改善の視点として、机間指導の重要性を今回２校の公開研を見て改めて感じた。一人一人の子どものスキルやコンディションをちゃんと理解した上で机間指導をしていると、今あの子はどの程度の理解をし、

どんな活動をノートに書いているかという点を見るだけで、それ以降の授業の進め方が劇的に変わっていく。机間指導の重要性を改めてまとめて整理し、各学校に発信してもらいたい。

（本川教育指導参事）

机間指導は非常に重要であることと同時に、習得が難しい技術の一つだと思っており、教師の授業センスが問われるという意見が良く出る。しかし、センスの有無や、難しいから若い先生にはできないというのではなく、指導の肝になる部分として捉え、指導主事も各学校の指導助言に机間指導のあり方を入れて指導しており、今後より一層取組んでいく。

（小出委員）

大館市の事業マイスターのシンポジウムを見た感想であるが、授業に向かう子どもとの約束事について、釧路市内でも現時点で実践している先生がおり、その授業も見たことがある。ある先生が、子どもとの約束事は授業をスムーズに進めるためにも子どもたちを授業に向かわせるためにも必要だと話しており、全ての先生がそれを意識して授業を進めることができれば良いと思った。芦野小のシンポジウムで中島先生が、先生がどこを目指して授業をするか、明確にイメージを持つことが大事だと話していた。授業で今日学ぶことに関しての目標もそうであるが、授業に関してだけではなく、授業を通してどのような生徒になって欲しいかというところまで見通して指導していくことが大事だと思った。子どもとの関わり方、子ども同士の関わり方に関しては、子どもが発言したときに声掛けをするなど、子ども同士の人間としての成長も見ながら授業をしているのだと、中島先生の授業を見て思った。小学校の時からそのような授業を受けてから中学校に上がれば、授業や活動に向かう姿勢も変わってくるのではないかと中島先生の授業を見て感じた。そのため、授業のスキルやわかりやすく子どもが理解しやすいだけではない授業を、中島先生は進めているのだとシンポジウムでの発言を聞いて思った。授業を理解させることが大前提ではあるが、授業改善、授業スキルだけではなく、特に中学校の先生の生徒との授業中の関わり方に関して、その子らしさを大事にしつつ、その子の人間としての成長も見つつ授業することが、その後の授業に向かう気持ちを引き出してくれるのではないかと思った。

（山口委員）

主体的対話的な深い学びで今求められていることは、本物の生きる学力を身に付けていくことのほかに、自分自身がこの集団の中でみんなにも先生にも、受け入れられて認められて生かされていることを実感しながら授業に参加できるということ。先ほどの問題行動等にも関連づけてであるが、自分はこの集団の中では間違った発言をしても良い、間違った発言もみんなが受けとめてくれて、軌道修正してくれて、生かしてくれているという安心感が集団の中にあれば、問題行動も必然的に減っていくと思う。今求められている授業の狙っている一つの大きな柱はそこにもあると思う。そういう集団の中で学校生活を送っている子は人間的にも成長でき、社会に出ても立派に生きた力を発揮して、他の人ともうまく関わりながら社会生活を送っていけると思う。

（本川教育指導参事）

意見がたくさん出ている授業のベースには間違っているかもしれないことも自信を持って

言えることであり、間違っても否定されない人間関係、風土があるところで、授業されている姿を見ると良いなと感じると思う。それはその時の指導だけではなく、学級経営や道徳的なしつけ部分が総合されていて、授業が成り立っているということ。そうしている先生もいるが、まだまだ釧路市では少ないため、どこの学校でもできるように進めていきたい。

（山口委員）

先生方の個々のスキルは別にして、同じ方向を向いてこういった授業を目指そうと先生方が意思統一できていれば子どもたちは対応できる。

（種村委員）

芦野小学校での中島先生の授業を見させていただいたが、中島先生の授業はやはり主体的で対話的な授業だと感じた。鳥取中学校の授業を見ることはできなかったが、大館市の先生が中学生に教えている授業を動画で見たことがある。その時は非常に対話的で主体的な授業ができていると思ったが、鳥取中学校の授業では対応的で主体的な授業はなされていたのか。小学校に比べて中学校の方が難しいのではないかと思う。

（本川教育指導参事）

鳥取中学校で行った国語の授業はＮＩＥの取組みの一コマであった。二つの新聞記事を提示するという内容であり、マイスターが主体的・対話的な場面を意図的に作っていたが、生徒がついていけていない場面も見られた。マイスターによる小学校での授業の姿にまでは至らなかった印象を受けた。

（山口委員）

種村委員から中学校の方が難しいのではないかという発言があったが、幣舞中学校の公開研を見た際、中学生たちは主体的・対話的な場面に十分対応していたため、実現できている学校もある。一概に釧路の中学校では難しいとは言えず、やり方によっては釧路の子どもたちでも十分やっていけるのではないかと思う。

（岡部教育長）

動画で授業をしていた先生に今回、鳥取中学校で授業をしていただいたため、授業の質は同じである。授業に対応している生徒のスキルに関しては、動画で見た生徒に比べて、今回釧路で見た生徒は、そこには至っていない気がした。授業は先生だけの問題ではなく、児童生徒も含めた学校全体で作っていくものだと実感し、引き続き努力しなくてはいけないと思った。